



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」91号
Issue Date	1994-12-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66443
Type	journal
File Information	yuin91.pdf





拾 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

目 次

○これからの 附属図書館長 三本木 孝…………… 1	○資料紹介……………12
○附属図書館教養分館25年のあゆみ	○本学教官著作物……………14
教養分館長 片桐千明…………… 4	○会 議……………14
○研修・講習会等…………… 6	○講演会等……………15
○お知らせ……………10	○人事往来……………16

こ れ か ら の

附属図書館長 三 本 木 孝

最近、館報の特別号として「将来像検討委員会最終報告」を公表しました。これは、全学図書系職員の若手を中心として図書館の構想を検討した結果です。図書館として正式な態度を示すものではありませんが、実務担当者としての貴重な意見・構想が含まれ、近未来図書館のあるべき姿を探るとき参考となる点を多く含んでいます。以下では、この報告を土台とし、一方では利用者に近い立場から、近い将来の展望を、よりゆるやかな前提条件の下で要約します。

これまで、図書館が見近な存在ではないと感じる方も多く、その存在感が文系と理系とでは違っています。しかし、その状態がいつまでも続くとは思われません。ハynesを利用したメールを例に考えます。誰かに電話をかけても相手が不在の確率が多くなっています。電話をかける、相手が不在、伝言を依頼、相手からかけてくる、今度はこちらが不在、といったことが繰り返されます。メールを使うと、この不便をかなり回避できます。拝啓も不要、要件だけを簡単に伝えることが出来ます。無料であることも幸いです。このように情報環境の整備は日常生活を変えています。図書館もその影響を受けます。

(1) 学生へのサービス：特に学部学生にとって普段の勉強に必要な参考書、辞典、ハンドブックの整備は必要です。教科書と比較して読みたいとか、別な角度から調べたいなどのために、図書館が典型的・標準的な図書を、複数冊そろえる必要があります。図書館がどのような図書資料を整備するかを考える際、図書業務を統合した、あるいは今後統合する文系学部の場合には問題がありません。地理的に分散する理系学部の場合には学部図書室との機能分担が

前提になります。専門性の高い本を学部図書室で揃えるとすれば、図書館では主に低学年用に基礎的で共通性の高い図書を揃えることになります。来年度からは教養部が廃止されます。この制度が変わる時期に、うっかりすると低学年向けの眼が不足するおそれがあります。教養部の廃止が低学年軽視を招かないためには、学部が新しく担う責務を認識すると同時に大学全体を横に眺める眼も必要で、図書館にもその責任を果たすことが求められます。残念なことに、図書館もまた、予算の硬直化に悩んでいます。開架されている図書の中で利用頻度の高い本はボロボロで修理しながら使ってもらっているのが実態です。全学的なコンセンサスを得て、改善する必要があります。

学生が講義実験のない時間帯をどこで過ごしているのでしょうか。学部の校舎には学生のためのスペースが十分にあるとは思われません。勉強したい学生のために、図書館は空間も用意しなければなりません。開架図書を整備し、自由に利用できるほか、本を読む机、他人の邪魔にならない程度の広さも求められます。学部図書室にも利用時間の拡大が求められますが、職員の数に限られ実現は困難です。現在、やり繰りして土曜日、夜間の開館を実施している図書館が利用環境を整えることが合理的です。開架スペースには国語辞典・理化学辞典など、留学生のために様々の辞典も備えていないと不便です。

基礎的な図書資料の利用者は低学年の学生に限定されるものではありません。研究者が、その守備範囲を見直すとき、守備範囲から離れるとき基礎的な部分からの勉強を必要とします。標準的、あるいは共通・境界領域に重点をおいた図書の整備は、そのためにも必要です。基礎的な図書の利用者を低学年にかぎるとサービスの形態にも誤りを招くことになります。

(2) 研究者へのサービス

ここでは、主に理系を念頭におくことにします。文系学部などと図書館本館とは廊下でつながり、統合の結果サービスが進むことが明らかだからです。かつて「理系分館」の機能と可能性が検討されたことがあります。が、「学内関連施設の将来計画、特に教養部の見直しとの関連もあり、現時点ではその見通しが明確になっていないなどのことから、概算要求とするのは当面困難な情勢である」(1988年)とされ、現在にいたっています。部局図書室との機能分担を前提にし、「理系分館」に求められる機能をまとめると次のようなものとなります。

(i) 部局などが整備するとは限らず、また、整備が後回しとなる境界領域あるいは共通領域の図書の整備 (前述)

(ii) 雑誌の整備・保存: 限られた予算で部局が整備する雑誌は利用者の多いものが優先します。利用者がいくつもの部局に分散すると整備は遅れます。また、共通性が高くとも優先度の低い雑誌も同様です。同じ雑誌を複数の部局で購入する一方、新しい雑誌を購入できないとか、価格が高くなるにつれて購入を中止することもあります。そのような場合、部局間で調整されてはいません。現在は無調整のため、「どこにでもある雑誌しかない」状況にあります。図書館が、せめて雑誌の系統的な整備の調整役を勤める必要があると考えています。大学全体として調整機能が求められているのは購入のみではありません。どの部局でも製本された雑誌が図書室の多くの空間を占めています。特に理系の場合、例えば20年前の雑誌が近くにある必要があるでしょうか。古い雑誌は一箇所にまとめ、欠号を補い、重複分を廃棄すると部局図書室もスペースを回復することが出来ます。来館者の便をはかるとともにコピーのデリバリーサービスを強化すれば、不便はないことと思います。

(iii) ネットワークを利用したデータベース:

すでに定着した書誌情報 (どのような本がどこにあるか)、カレントコンテンツなどの学術

雑誌コンテンツ（論文のタイトル、著者、アブストラクトなど）情報は部局の端末から利用できます。近く、図書館の計算機が更新されてもっと便利になります。他にもケミカルアブストラクトなど複数の部局で購入しているものもネットワークにのせたいと思います。いずれも、雑誌の形態に比較してスペースを節約できることのほかキーワード検索が容易なことも利点の一つです。学内では、誰がどのような研究をしているか、どのような機器がどこにあるかの情報も今後共同研究を進めるには重要です。

(iv) 部局図書室では整備の難しい辞典、ハンドブック、年鑑、数値表など参考資料の整備：

高価であるために現在も欠けている資料が数多くあります。古い資料が役には立たないことも忘れることができません。この種の資料は他の大学にあっても利用が困難ですが、キャンパスのどこかに揃っていればそれほど不便はありません。なお、このような資料の整備と平行して、どのような資料をどのように使うかを援助できるよう図書館職員の専門性がさらに向上することが求められます。

このような機能を考えると、以前に検討されたような「理系分館」の独立した施設は不要であろうと思います。かつて「分館」が検討されたのは、現在の建物が適当ではないにも係わらず、その存続を前提とする時期であったからです。また、部局図書室と図書館の連携が機能して初めて「大学図書館」が十分に機能することになります。現在はその連携が不十分です。

上に述べたサービスを図書館が担うためには、現在の「本館」の有効面積が小さく、職員の活動にも不便です。全学の合意を得て、新しい建物を実現したいものです。その場所や大きさを考えるとき、上述の機能のほかに次のような点も考慮する必要があります。大学全体の情報活動を支えるため大型計算センター・情報処理教育センターなどとの連携が容易であること、会議の場所を備えること（これまで本学では図書館利用教育を行っていないのですが、他大学では、特に新入生に実施する例も少なくありません。大学院あるいは新任の教官職員も同様で、特にデータベース利用の実地講習は今後ますます必要となります。ビデオ、端末を備えた部屋は図書館利用の他にも各種の講習、演習、自習、会議に利用できます）。また、次の点も大切です。近い将来、研究者が必要とする情報の多くをネットワークを通じて、研究室にいらして入手できると期待されます。しかし、研究者にとって大切なことは、人と人との対話によって異分野に接触し、新しいアイデアを得ることです。これからの図書館には「静かな場所」のほかに対話に適した空間も必要と考えます。

現在、札幌キャンパスには図書館本館と教養分館があります。教養部が廃止された後も、当面は現在の教養部の校舎で低学年教育の大部分が行なわれますから、分館が学習図書館の機能を果たします。また、言語文化部、文学部共通講座の教官の大半は教養部に研究室をもち、分館はそのサービスを担います。しかし、長期的には、図書館にとって分館をおくことには基本的にメリットがありません。管理、サービスに従事する職員を分散して配置するため、十分なサービスが不可能です。また、サービスの拡大（学外、休日、夜間）に対応できません。また、図書資料を重複して整備する結果、限られた図書資料費の下では、希望の本がないとの利用者の不満が続きます。視聴覚機材、情報端末についても同様です。適当な場所に図書館をおくことができれば、分館を統合することが可能となります。（理学部教授）

附属図書館教養分館 25 年のあゆみ

附属図書館教養分館長 片 桐 千 明

教養分館とは

本学附属図書館の教養分館が設置・発足をみて 25 年を迎えることになった。日頃、学生諸君には圧倒的に利用されながら、教養課程教育に携わる教官や一部の職員以外にはあまり知られていない分館の現状とこれまでの歩みを紹介し、その役割を考えてみたい。

北17条にある教養部校舎の南側に隣接して建つ4階建ての分館は、通常の事務室、会議室、書庫などを除くとその総面積 4,558 m² の約半分が開架および一般閲覧室で占められ、806 席の閲覧座席と数十席の視聴覚室、語学演習室、ビデオ視聴室、演習室を含めると合計 964 名分の利用可能な座席を用意している。教養部在籍の学生数約 5,000 名、また図書館外貸出利用者数の 1/3 が学部生であることに示



されるように学部生の利用もきわめて多いことを考えると、この座席数は決して多いとは言えないであろう。事実、平成5年度の入館者数 351,425 名、1 日平均入館者数 1,495 名という実績は、分館が常にフル稼働していることを如実に示している。

分館の蔵書数 208,314 冊という数字は、本館の 1,013,501 冊 (文、法、経済学部、スラブ研究センターの分を含む) には遠く及ばぬにしても、その歴史の浅さからすれば結構な数と言える。学習図書館としての性格上、蔵書のなかみは現代的な専門雑誌よりは一般図書、参考図書などを多く含む傾向をもち、68,182 冊 (巻) は開架図書または視聴覚資料として利用者に直接公開されている。こういった学習図書館としてのサービスのほかに、分館が言語文化部の図書室としての役割も担っていることは関係者以外にはあまり知られていない。事実、分館の上記蔵書数のうち 84,030 冊は言語文化部のものであり、また分館がもつ洋書 79,767 冊のうち 63,112 冊は同部に属するものである。また平成5年度の年間受入図書、雑誌数いずれをみても分館と言語文化部のそれはほぼ等しくなっている。これらすべてにかかわる業務を、本館情報サービス課長補佐を兼任する事務主任と 8 名の定員および 5 名の事務補佐員でまかなっていることになる。

分館の生い立ち

「北海道大学百年史一部局史編」や「北海道大学教養部三十年史」などによれば、教養分館が設置されたきっかけは教養部校舎が現在の場所に新設されたことにある。本学の教職員でも当時を知るのは少数になってしまったと思われるが、古河講堂とその周辺に散在する (現在

はほとんどが姿を消した) 木造の校舎を教養課程の授業に利用していた頃には、教養部学生による図書の利用は隣接する附属図書館でこと足りていた。しかし約1キロ離れた現在地に校舎が移転すると従来のような利用は困難となり、1963(昭和38)年11月には新校舎の玄関わきの教室の一部を割いて附属図書館の分室というかたちで開架図書室が設けられた。附属図書館からは職員1名が配置され、約2,900冊の図書、約220席の座席が学生の自習室を兼ねて用意された。その後「分室」の蔵書数は学生数の急増とともに着実に増え続け、閲覧室の部分的増設をくりかえしながら数年をしのいだ。

たび重なる対症療法的な対応にもとづいて出された教養部からの改善の提案を経て、1968(昭和43)年までに全学的な会議体として分館設置準備委員会が設置され、1969(昭和44)年4月1日付けで「北海道大学附属図書館教養分館規程」および関連する分館長選考規程、分館委員会内規などが施行されて、分館は制度上の発足をみたのであった。発足とともに始められた分館の建物の新築工事は、その年に起きた教養部のバリケード封鎖に代表される北大紛争のさなかにも進められ、同年10月末に落成した。教養部からの図書の移転は、11月8日の機動隊による教養部封鎖解除と12月上旬に起きた一時的な再封鎖の間に行なわれ、12月中旬には開館のはこびとなった。事務主任以下8名の職員が閲覧掛として配置された。

発足時の分館は総面積2,406㎡の3階建てで、座席数約500席、1970年度の年間入館者数は約175,000人であるなど、いずれも現在のほぼ半分の規模であったことがわかる。しかし利用学生数の著しい伸びに対応した増築の要望がはやくも1971(昭和46)年には湧きあがり、全学的な支持を背景に増築工事の概算要求が認められて1977(昭和52)年7月に同工事が竣工し、4階建てで視聴覚室その他前述の規模と設備を備えた現在の分館が実現したのである。増築にともなって利用可能となったビデオ視聴室、LL装置、演習室などの利用要項があいついで制定され、学生や教官に開放されるようになった。とくに演習室は少人数教育の場として、以来教養部校舎の教室不足を補って余りある貢献を現在までし続けている。

それ以後最近十数年の分館は、内容の充実の時期と言える。図書購入費の予算が徐々に拡大する一方、1986(昭和61)年度からCLARK(北大図書館オンラインシステム)が本稼働するに伴って蔵書の検索、図書の貸出や返却がオンライン化され、本格的な情報化時代を迎えた。さらにHINES経由で提供されるMEDLINEのみならず全分野のカレントコンテンツのデータベースを検索することが可能な専用端末機を設置し、近々北キャンパスの研究者の利用に供せる体制が整えられた。今年に入ってブックディテクションシステムが本稼働し、また新たに電動集密書架が導入された結果256,000冊までの収容が可能になった。

分館のこれから

分館は官制上はあくまでも附属図書館の一部であって、教養部とは別個の存在である。しかし、その設立の経過にみられるように明らかに教養生の学習図書館としての機能が期待され、運営にあたる分館長、分館委員のいずれもがつねに教養課程担当教官から選ばれてきた。図書購入費のなかで主要な位置を占める「教官選定図書」の依頼が教養課程教育を担当する全教官に対して行なわれるのも、同様の趣旨からである。利用頻度がきわめて高いため特に破損がはなはだしい自然系学習図書約2,000冊を補充する目的で、1992年から3年計画で特別の予算を計上しているのも、教養分館ならではの措置と言えよう。

本学は平成7年度から学部一貫教育体制のもとに新入生を迎えようとしている。したがって“教養”分館は奇しくも25周年をもって自然消滅する運命にある。が、初年次生を対象とするいわゆる全学教育が現教養部校舎で展開されるかぎりには、分館がこの場所でこれまで果たし

てきた役割とその必要性は当面堅持されつづけるであろう。教養分館の生い立ちをたどると、厳しい現実を後追いするかたちとはいえ、官制化されないなりの教養部での学生の学習条件を改善するために、全学の支援があって成りたってきたことがみえてくる。北大方式と呼ばれてきた教養部との25年余におよぶかわりのなかで蓄積された実績を継承し、フレッシュマンの知的鍛練をになう場として分館が機能しつづけ、将来どのようなかたちをとるにしろ本学の学習図書館の中核へとつながる核になり得よう、絶えざる全学的な関心と支援を期待したい。

(理学部教授)

本稿は「北大時報」No. 487 (平成6年10月) への寄稿文を転載したものです。

◆ 研修・講習会等

○ 平成6年度目録システム地域講習会が開催されました

今年度の講習会は、平成6年6月27日(月)～7月1日(金)まで、北海道大学附属図書館会議室、システム研修室を会場として開催されました。

この講習会は、目録システム講習会の受講機会の拡大を図るため、学術情報センターで実施しているものと同等の講習会を各図書館等と共催し、目録業務担当職員にシステムの運用に関する知識・技術を習得させることを目的としています。

今年度は、道内の各大学8大学から12名の受講者が出席され、全員無事修了証書を授与されました。

講習内容は、目録システム概論・目録情報の基準Ⅰ・Ⅱ等の講義や図書登録・雑誌登録等の実習でした。今年度からは、前年度までには無かった「検索課題集」・「登録課題集 図書編」・「登録課題集 雑誌編」のテキストも増え、受講者にとってより一層充実した、また大いに実りのある講習会でありました。



○ 第37回北海道地区大学図書館職員研究集会が開催されました

今年で37回を重ねる標記研究集会が、平成6年7月29日(金)、北海学園大学を会場として、下記プログラムにより開催されました。当日は、猛暑のなか、北海道地区の23大学132名及び加盟館以外の団体から14名のオブザーバーの参加があり、講演、研究発表の熱心な傾聴はもとより、毎年道内の大学図書館職員が一同に会する場として互いの情報交換、交流を深め、有意義かつ盛会裡に終了しました。

・プログラム

当番館挨拶 北海学園大学附属図書館長 米 森 文 嗣

講演 「外国と比較した日本の裁判制度」

札幌学院大学教授 渡 部 保 夫

〃 「図書館・文書館の狭間—北方資料を中心に—」

北海道史研究協議会副会長 谷 澤 尚 一

〃 「図書館と国際援助」 北海道情報大学講師 福 田 都 代

研究発表 「カレントコンテンツマルチ検索システムについて」

北海道大学附属図書館 田 中 健太郎

〃 「大学図書館の電算化について—機械化アンケートから—」

酪農学園大学附属図書館 浦 川 利 幸

会は米森文嗣北海学園大学附属図書館長の挨拶で始まり、最初に、30年間裁判所判事を務められた渡部保夫先生より講演がありました。職業裁判官制度、市民裁判官制度、参審制度、陪審制度など各国の裁判制度と日本の裁判制度についての比較をされた後、自国法愛国主義、官僚主義、司法権力機構の同調化現象について、具体例を挙げながら指摘され、正しい司法行政のありかたとして“法律に従って正義を実現し、真に国民のための裁判所になり切る必要がある”と講演されました。

続いて、中世国語資料、北方文献資料の研究者としてご活躍の谷澤尚一先生の講演では、カードまたは目録不備のため、容易に検索できない状況下にある書籍・文書類について、資料館・文書館での具体例を挙げながら、その目録標示の問題点等について指摘され、図書館として書誌データを正確に捉え、提供することの重要性について資料を求める側から講演されました。



午後の講演では、UNESCO に勤務されライブラリアンとして活躍された福田都代先生から、中南米での図書館援助活動の実際、開発途上国の図書館に対する日本の援助について、ODA, JICA, NGO 等の国際援助の実態と援助内容やアフターケアの問題点を指摘され、相手国の事情を考慮した援助が必要であり、現地図書館員の指導・育成の重要性と援助をきっかけとした自助努力の喚起が大切である。国際援助活動の中で図書館援助は目立たない存在ではあるが、図書館は、図書資料の寄贈、姉妹図書館構想などで平和的な国際貢献の可能性を持っていると講演されました。

研究発表では、田中健太郎氏から現在北大附属図書館が提供しているカレントコンテンツマルチ検索システムについて、そのシステムの概要と利用状況について、また、図書館でのパソコンの利用について、氏自身システムの開発に関わった経験から研究発表されました。また、浦川利幸氏からは大学図書館の電算化について、昨年度同氏が行った道内大学図書館機械化ア

ンケートの結果から、詳細な分析と集計報告が研究発表されました。

最後に、本研究集会の会場校として準備を進めて下さいました北海学園大学附属図書館の皆様のご苦勞に敬意を表し、感謝申し上げます。

○ 平成6年度情報検索システムオリエンテーションが実施されました

附属図書館が提供している情報検索サービスについて、利用者に対する援助とシステム利用の促進を図るため、標記オリエンテーションを下記により実施しました。

本オリエンテーションは、かねてより要望の高かった CD-ROM 等ニューメディアによる情報提供システムの利用支援について、本学教官および大学院学生・研究生を対象に今年度初めて企画されたものです。

・実施の概要

実施月日：平成6年7月12日～8月2日の期間に7回開催

会 場：附属図書館参考閲覧室

テ ー マ：CD-ROM, CCoD マルチ検索システムおよび NACSIS-IR 検索システムの利用申請・接続等、各システムの概要、検索の実際、原報入手等

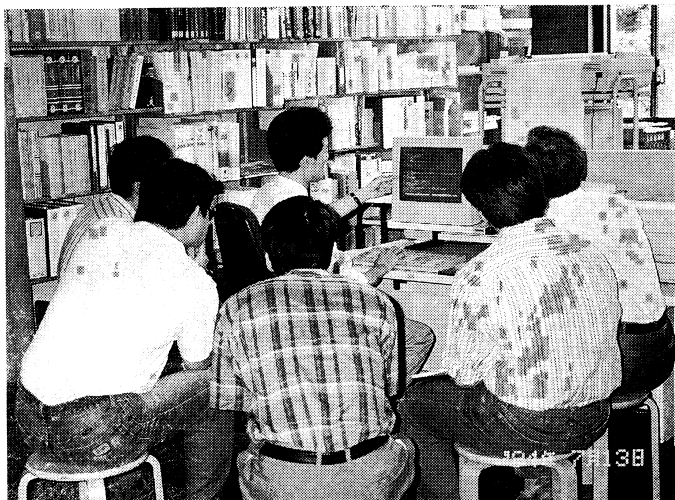
参 加 者：33名 (教官11名、大学院学生・研究生22名)

検索機器台数、指導人員等の制約により1回の参加者を5名と制限したことにより実施回数を増やさざるを得ず、図書館側としては幾分負担の大きいものとなりましたが、各参加者にとっては、少人数のためかえって質問もしやすく、理解を深めるためには効果的であったと思われます。今後、検索機器やプレゼンテーション設備の充実等環境整備が望まれるところです。

また、広報については、HINES-BBS 掲示のほか、案内通知やポスター掲示等各学部等図書室のご協力により大きな効果を挙げる事が出来たことに対し、感謝申し上げます。

・アンケートから

なお、実施に際し参加者アンケートを行った結果、初めての試みで不慣れな点があったにも拘らず、参加者にはおおむね満足との評価を頂きました。参加者の半数が既にシステムをよく利用されており、沢山のご意見を頂戴しました。その中で多かったのは、「MEDLINE のフルセット配信および CCoD の全分野装備」、「医・生物学系以外の自然科学分野及び人文・社会科学分野のソフトの充実」、「主題別オリエンテーションの定期的な開催」などで、その他、「接続パソコンを問わない UNIX サーバー機による配信システム」、「インターネット Gopher や WWW のデータベースの利用支援」等について貴重なご意見、ご希望が寄せられました。



・ま と め

提供する情報の媒体が多様化し、システムが高度化、複雑化する中で、利用者と情報のインターフェースの役割を担う図書館として、このような利用者支援のためのオリエンテーションの重要性を痛感するとともに、今後、広報、内容等に改善を加え継続性のあるより効果的なオリエンテーションを企画して行きたいと考えます。皆様のご意見をお寄せ下されば幸いです。

(情報サービス課参考調査掛)

○ 学術雑誌目次速報データベース入力説明会が開催されました

本年 11 月より運用が開始された「学術雑誌目次速報データベース」のデータ入力説明会が 10 月 4 日 (火) 学術情報センターの主催で附属図書館会議室で開催されました。「学術雑誌目次速報データベース」は主に大学等で発行される紀要・学協会出版物を対象として、その目次情報をデータベース化し、NACSIS-IR を通して全国の研究者へサービスされるものです。当日は、16 国公立大学、8 短期大学、3 高専から計 45 名の出席がありました。説明会は、学術情報センター助教授大山敬三氏の基調講演「学術情報の発信と図書館」で始まり、その後説明会・質疑応答があり盛況のうちに終了しました。

北大総合情報ターミナルの実現へ向けて

榆蔭 89 号 (1994. 3) では、平成 7 年 3 月の新北海道大学図書館情報システムの稼動に向けて、北大の全学情報システムという考えと、そのシステムを誰もが利用できる北大総合情報ターミナルをご紹介します。附属図書館では、この総合情報ターミナル実現の第一歩として、Gopher, WWW のサーバを準備中です。Gopher, WWW システムを使うと、Internet などのコンピュータネットワーク上の多様なデータベースに同じ方法で、また、一つのサーバに接続することで次々と他のデータベースに、アクセスすることができます。

◆ お 知 ら せ

○ 北大図書目録データベース第2期遡及入力事業計画第3年次(平成5年度)報告

平成3年度から実施しております第2期遡及入力事業5ヶ年計画第3年次(平成5年度)の入力冊数は以下のとおりです。

平成6年度は30,000冊の入力を予定しております。

1. 第2期遡及入力事業第3年次(平成5年度)入力冊数

部 局	和書入力冊数	洋書入力冊数	入力冊数合計
図 書 館 本 館	7,381	9,571	16,952
教 養 分 館	2,296	837	3,133
文 学 部	538	1,018	1,556
経 済 学 部	1,501	901	2,402
理 学 部	0	10	10
医 学 部	127	2,113	2,240
農 学 部	1,483	0	1,483
触 媒 研	219	615	834
ス ラ ブ 研	0	1,024	1,024
医 療 短 大	1,559	31	1,590
合 計	15,104	16,120	31,224

2. 第2期遡及入力事業第4年次(平成6年度)の入力予定

入力予定: 30,000 冊

- | | |
|--------------------------|----------|
| 1) 酸性劣化状況調査対象図書(国大図協申合せ) | 5,000 冊 |
| 2) 附属図書館図書 | 9,000 冊 |
| 3) 文系部局受入図書 | 10,000 冊 |
| 4) 自然系部局受入図書 | 6,000 冊 |

○ 「明治大正期北海道写真目録」の入力を開始しました

平成6年度科学研究費補助金の交付決定通知を受け、8月から「明治大正期北海道写真目録」のデータ入力作業を開始しました。今年度は、他に「開拓使外国人関係書簡目録」「北海

道地図・図類目録」「旧外地関係資料目録」のデータ作成を順次行っていく予定です。本事業は、ワークステーションによるマルチメディア対応の「北方資料データベース」計画の一環として行われております。なお、この設備は概算要求中ではありますが、パソコンによるプロトタイプを作成しており、多くの来館者に対するデモで好評を博しています。

○ カレントコンテンツ全セクションのマルチ検索サービスが開始されました

カレントコンテンツ (Current Contents on Diskette) のデータを、同時に複数の利用者が HINES を通して検索できる「CCoD マルチ検索システム」では、これまでライフサイエンス版 (Life Sciences) のみをサービスしてきましたが、このほど全セクションのサービスを開始しました。新たに加わった5セクションは以下の通りで、最近6ヶ月分が検索できます。

- ・ Agriculture, Biology & Environmental Sciences (with ABSTRACTS)
- ・ Clinical Medicine (with ABSTRACTS)
- ・ Engineering, Technology & Applied Sciences
- ・ Physical, Chemical & Earth Sciences (with ABSTRACTS)
- ・ Social & Behavioral Sciences

ただし、ライフサイエンス版がユーザ数無制限の契約であるのに対し、今回サービスを開始する5セクションの契約は10ユーザであるため、接続対象のユーザを附属図書館、教養分館、および部局図書室に限定させていただきました。既にインストールも終了し、附属図書館と教養分館では全セクションが利用できます。各部局図書室でどのセクションが利用できるかについては直接お問い合わせください。

○ 朝日新聞記事データベースの提供を開始します

附属図書館参考閲覧室では、かねてより要望の高かった「朝日新聞記事データベース」のCD-ROM (CD-HIASK) の提供を開始します。このCD-ROMでは、件名・人名などから朝日新聞の記事を検索し、記事の全文を読む事が出来ます。提供するのは1985年から1993年までの情報です。また、1985年から1991年のデータには、件名および人名の総合索引も付加されています。また1993年よりは検索ソフトウェアがWINDOWS対応となり、検索イメージが大幅に変わっておりますのでご注意下さい。

このデータベースには絵図、写真等のデータは入力されていませんが、このシステムを使って記事掲載の日付の確認ができれば、附属図書館書庫の新聞縮刷版を簡単に利用する事が出来ます。なお一部の署名記事に付いては、著作権の問題のため本文のデータが入っていない場合もあります。

参考閲覧室のPCを使つてのスタンドアローンでの検索となりますので、利用を希望される方は前もって、附属図書館参考調査掛 (内線4107) に予約される事をお勧めします。なお、このCD-ROMの検索は無料です。多数の方の利用をお待ちします。

◆ 資料紹介

○ 平成5年度特別図書購入費で購入した資料

Archiv für Slawische Philologie. Vol. 1-43. 1876-1929

(スラブ文献学雑誌)

ベルリン、ペテルブルグ、ウィーン大学の教授を務めた V. Jagic の主導によるスラブ学の先駆的かつ代表的な雑誌。スラブ圏の文学、文献学、芸術および歴史学等における諸問題についての論文、記事、批評、史料とその注釈が掲載されている。

Critical Concepts. 3 section. 1993

(批判的諸概念)

国家、権力、市民権といった社会科学の基礎概念に関して代表的な研究者の論文を網羅的に収録したものであり、古典的な理論から現代的な議論まで、文献リストとしても活用できる基礎的かつ高水準の論文集である。

Research Policy. Vol. 1-19. 1972-1990

(研究・開発)

企業、政府機関、大学の研究開発部の活動と政策に関する雑誌のバックナンバー。

日本人口統計集成 第一期全7巻 明治5-35年

第三期全7巻 大正2-8年

国勢調査実施以前における内務省編の日本人口統計集成。

教育時論 Vol. 1142-1213 大正6-7年

文部省、陸海空軍の教育政策の動静の紹介ならびに論評、海外の教育事情と学説の紹介等を主とした教育全般に関する総合雑誌。授業実践記録、教育内容、教育法、教育実践、学校経営、学校行事、訓育論、教師論、学制改革論等に関する学術論文が集められている。

都市公論 Vol. 1-64 補巻1 別巻1 大正8年7月-昭和20年7月

大正6年、都市計画の研究、普及宣伝のために設立された内務省の外郭団体である都市研究会(現都市計画協会)の機関誌。戦前における都市計画、道路、住宅、土地等の都市問題、保険、衛生、細民等の社会政策の諸問題が網羅されている。

DELAMARE (Nic.) Traité de Police. 2nd ed. 4 vols. 1722-1738

(警察研究)

旧制下の警察に関する古典的著作で、第1巻では、パリの歴史が、第2巻以降では、宗教、同業組合について検討され、ついで道路、衛生、食料品行政に関する諸法令を検討。また、王令や諸判決のテキスト自体も再録されている。

Constitutions of the United States: National & State. (1974-update) 2nd ed. 7 vols.

(アメリカ合衆国憲法集：連邦と州)

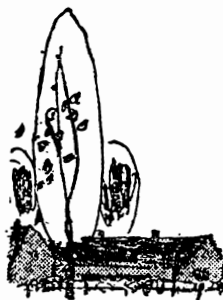
米国憲法、州憲法及びバージン諸島、サモア、プエルトリコ、グアム等米国自治領の憲法典をすべて収録した憲法集。

○ 北方資料室前主任秋月俊幸氏の著書が出版されました

前附属図書館情報サービス課図書館専門員・北方資料室主任 秋月俊幸氏(現法学部講師)の著書「日露関係とサハリン島 ―幕末明治初年の領土問題―」が本年6月筑摩書房より出版されました。

内容は、氏の主要な研究テーマの一つである旧樺太(現在のサハリン)をめぐる幕末期・明治初期の日露関係についてまとめたものであり、氏の長年にわたる研究成果、および、氏の博覧強記ぶりをうかがわせる好著となっています。

なお、本書は、附属図書館北方資料室および教養分館開架閲覧室に所蔵されています。



◆ 本学教官著作物 (本館・分館受贈分)

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました

〔本 館〕

○法 学 部

秋 月 俊 幸 日露関係とサハリン島 筑摩書房 1994

○スラブ研究センター

望月 哲男 (共編) ドストエフスキー「罪と罰」コンコーダンス (文脈つき用語索引) 第1—3巻 北海道大学スラブ研究センター 1994

附属図書館では、本学教官著作物をできる限り収集するようつとめております。今後とも、よろしくご協力下さい。

◆ 会 議

国立大学図書館協議会理事会 <平成6年6月2日(木)> 場所: 東京大学

第41回国立大学図書館協議会総会 <平成6年6月23日(木)~24日(金)>

場所: 伊豆長岡町総合会館

協議事項等

第1日

1. 予算・決算等協議会の維持・運営に関する諸事項
2. 平成6年度事業計画について
3. 文部省所管事項説明
4. 研究集会「生涯学習の進展に対応した図書館サービスのあり方」

第2日

1. 分科会 (図書館の予算・人事、運営・サービスに関する協議)
2. 全 体 会 議

第155回図書館委員会 <平成6年7月21日(木)>

議 題

1. 平成5年度決算及び平成6年度予算方針 (案) について
2. 図書館資料の不用決定について

報告事項

1. 大型コレクションについて
2. 平成7年度概算要求事項について
3. 第41回国立大学図書館協議会総会について
4. 平成6年度科学研究費補助金「研究成果促進費」の交付内定について
(北方関係資料総合データベース)
5. 平成5年度遡及入力結果等について
6. カレントコンテンツ・データベース・サービスの方針について
7. そ の 他

北海道地区大学図書館協議会総会 <平成6年8月25日(木)> 場所: 函館大学

第 68 次国立七大学附属図書館協議会 <平成 6 年 10 月 20 日 (木)>

場所：北海道大学附属図書館

<協議事項>

1. 学術審議会部会報告「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」に対する対応について
2. 大学図書館における研究開発機能の整備について
3. 図書館の組織改変と呼称変更について
4. 学内メディアセンターに対する図書館の対応について
5. 学内 LAN の整備と学内学術情報システムの検討にともなう委員会活動と組織について
6. 学術情報センターの地域研修会の開催について
7. 地域別保存図書館機能と七大学の役割について

第 27 回国立七大学附属図書館部課長会議 <平成 6 年 10 月 21 日 (金)>

場所：北海道大学附属図書館

<協議事項>

1. 学術雑誌目次速報データベース形成事業への対応について
2. 次期電算化システムへの対応について
3. 学術雑誌目次速報データベースの入力体制について
4. 図書館資料のネットワーク化 ―紙メディアから電子メディアへの対応―
5. UNIX 図書館システムへの移行について

国立大学図書館協議会理事会 <平成 6 年 10 月 27 日 (木)> 場所：東北大学附属図書館

◆ 講演会等

○第 37 回北海道地区大学図書館職員研究集会 (6. 7. 29)

(主催) 北海道地区大学図書館協議会 (場所) 北海学園大学

○第 36 回北海道図書館大会 (6. 6. 16~6. 17)

(主催) 北海道立図書館 札幌市中央図書館 (場所) 札幌市社会福祉総合センター
札幌市女性センター

○平成 6 年度北海道大学図書館講演会 (6. 10. 6)

(主催) 北海道大学附属図書館 (場所) 北海道大学附属図書館

演題 「宗教における文字と音声」 文学部教授 土屋 博氏

「図書館サービスと情報アクセス」 図書館情報大学助教授 石井啓豊氏

◆ 研修・講習等

○平成 6 年度目録システム地域講習会 (6. 6. 27~7. 21)

(主催) 学術情報センター (場所) 北海道大学附属図書館

受講者 中野真弓美 (情報システム課目録情報掛) 杉田茂樹 (情報システム課学術情報掛)

一戸佳織 (情報管理課教養分館情報管理掛) 村田邦恵 (農学部)

○平成 6 年度情報検索システムオリエンテーション (6. 7. 12~8. 2)

(主催) 情報サービス課 (場所) 附属図書館参考調査掛

受講者 33 名

榆 蔭 (北大図書館報)

○平成6年度大学図書館職員長期研修 (6.7.18~8.5)

(主催) 文部省及び図書館情報大学 (場所) 図書館情報大学他

参加者 福盛田勉 (水産学部)

○平成6年度図書館等職員著作権実務講習会 (6.7.27~7.29)

(主催) 文化庁 (場所) 東京大学

参加者 小林真木子 (医学部) 福井みゆき (工学部)

○ONAC SIS-IR 地域講習会 (6.9.20~9.21)

(主催) 学術情報センター及び北海道大学 (場所) 北海道大学情報処理教育センター

受講者 25名

○総合目録データベース実務研修 (6.10.11~10.28)

(主催) 学術情報センター (場所) 学術情報センター

参加者 佐々木光子 (情報管理課教養分館情報管理掛)

◆ 人 事 往 来

○採 用

佐藤真紀子 附属図書館情報システム課目録情報掛 6.10.1

○退 職

金井孝 附属図書館事務部長 6.6.30

○転 入

遠藤勝久 附属図書館事務部長 (弘前大学附属図書館事務部長) 6.7.1

計 報

附属図書館前館長近藤潤一氏には、平成6年9月16日、急性心不全のため急逝されました。享年63歳でした。

ここに慎んで哀悼の意を表し、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

氏は本学文学部教授、教養部長を歴任されたのち、平成元年4月より本年3月定年退官されるまで3期5年にわたり附属図書館長をつとめられました。その間、図書館機能の高度化、とりわけ学内LAN対応業務の推進、さらには次世代図書館構想などにより、附属図書館の発展のため多大の貢献をされました。また、本誌へたびたび玉稿を寄せられ、図書館職員の意識の覚醒と高揚に努められました。

氏はまた札幌の句誌「壺」を主宰するなど、その創作・評論活動を通じて道内俳壇の第一人者として知られておりました。退官後は、本学名誉教授、北海学園大学教授となられ、学界における今後の一層の活躍が期待されておりました。

北海道大学附属図書館報「榆蔭」(ゆいん) 通号91号

平成6年(1994年)12月8日発行 発行人 附属図書館事務部長 遠藤勝久

編集事務 山本幾夫・阿部勝義・岡田 潔・菅原英一・佐藤清一・金子 敏・

岸本一志・三橋 修・松尾博朋・伊藤啓子・土田京子・柴森義晴

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 Tel. 706-2967

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北2条東12丁目 Tel. 231-5560・5561